

公益社団法人隊友会

館山支部だより

平成28年7月号 (通巻75号)

支部の連絡窓口

千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川村 巖
メール g_marine@f5.dion.ne.jp

英国のEU離脱と「国民投票」

英国が国民投票でEU離脱を決めた途端にあわてて「投票の撤回、再投票」を求める署名が450万票を超えたという。EUの内容・義務すら知らない国民が多かったと言われる。なんともおかしな話だとは思いませんか。英国の議会制民主主義をお手本としてきた日本にとって、今回の出来事は決して対岸の火災ではないのです。日本も遅かれ早かれ同じような選択を求められることになると思うのです。何かにつけて「民意・国民の声」を煽るマスメディアや「主権在民」を口にする国民が多い中、結果が出てしまっただけでは後戻りはできないのです。憲法・安保のことも知らず・理解・知ろうと(努力も)せず、わけもわからないまま投票することだけは避けてもらいたいものです。

<川村 記>

支部活動の概要 (実績 & 予定)

《6・7月の活動実績》

- 6.12(日)&7.18(月)海・河川浄化運動協力(船形&市内)
- 6.20(月)千葉県隊友会臨時支部長会議(千葉市)
- 7.12(火) 航空学生100キロ行軍声援(富浦)
- 7.20(水) 千葉県隊友会前期理事・支部長会議(千葉市)

《8・9月の活動予定》

- 8.20(土) 市民講座(館山市中央公民館)
「歴史認識」から見た館山の旧軍・戦争」
- 9.22(木) 館山航空基地開隊63周年記念行事

「憲法・安保」投稿の反響・「市民に問う」た成果は？

5月初旬に地元房日紙に拙稿「憲法・安保をめぐる果てしなき論争」が連載されましたが、展望台の論説(下記)からも、地元メディアとして 憲法週間にタイミングを合わせて、市民に「憲法を現実の問題として考えてもらう」上での好個の題材としてアピールする意図的な配慮があったものと、善意に解釈しております。

早速、数名の知人から電話・手紙でエールが寄せられ、大いに力付けられたことは言うまでもありません。あわせて紙面に寄せられた賛正・賛同論は、第三者の客観的な見解・主張として、より説得力ある強力な援護射撃になったと感謝しております。

今回の投稿は個別論ではなく、とりわけ改憲・安保に反対する人々が「日本の防衛をどのように考えているのか」、本音(ほんね)を聞きたかったのですが、期待した本質・核心部分に触れた反論は見られず、改めて防衛問題に対する人々の考え方のギャップの大きさを痛感させられた次第です。

拱手傍観、我関せずでは問題の進展は望めないと思うのです。自衛隊OBである以前に国民・市民の一人として、非才を省みず(勇気を出して)、今後とも機会をとらえ方策を講じて微力ながら声をあげていく所存です。それが黙々と勤務に邁進する隊員にとって、いささかなりとも励みになれば望外の喜びとするところです。 <川村 記>

《房日(5. 5付)「展望台」要旨》

「護憲・改憲の前に」という見出しで「(私的見解として)平和主義といえども自衛権は認められる。そのために自衛隊と日米安保がある。攻めてくる敵に対しては戦う。安保法制はこのためのものでしょう」と切り出し、現憲法の基本になっている平和・民主主義は、固定概念・永久不滅のものでなく、いかようにも変容し 国民の成長とあいまって成熟するもの」として、「護憲・改憲の前に思いを致すべきものと考え」と結んでいる。

《紙面に寄せられた賛否両論》(タイトルのみ)

◎賛正賛同論

- ・「川村氏 寄稿は意義ある内容」(市内S氏)
- ・「敗戦国の戦後はあまりに自虐的」(市内匿名氏)
- ・「戦争抑止に必要な論議」(南房総市S氏)

●反論 (“拙稿を意識した”と思われるものを含む)

- ・「憲法・安保をめぐる果てしなき論争」の実像」(市内T氏)
- ・「世界での国防と日本の安全法制」(館山市議I氏)
- ・「真の世界貢献は戦争しないこと」(市内女性U氏)

館山基地軽音楽部・基地外での広報に一役

渚の駅たてやま2階展望デッキで館山航空基地の軽音楽部員による演奏が行われた。今月30・31日の行事「海まちフェスタとヘリ・フェスティバル」のイベントとして、積極的に基地の外での広報活動を展開したもの。ちなみにリーダーは元広報室長、ギター独奏に喝采を博した現広報室長など、課外の活動と広報活動を一体として推進している印象すら受けた。

軽音楽部の歴史は古く、現在、4~5個バンドを編成できる25名以上の部員を抱え、レパートリーも豊富・充実の域という。

夕暮れどきの一時間余、肩の凝らない等身大の演奏に、集まった家族連れや若いカップルをまじえた100名近い観客から、

7.23(土)夕 渚の駅たてやま・軽音楽コンサート



《鏡が浦 シーサイド・サンセット・コンサート》

読後感

「日支事変とは何だったのだろうか」 月刊「日本会議」から

中学2年の頃、社会の授業で先生が「日支事変(戦後「日中戦争」と呼ばれる)は、盧溝橋での(たった)1発の銃声によって引き起こされた」と強調していたのが印象に残っている。娘が高校時代に使った社会(歴史)の教科書にも同じようなトーンで記述されている。日本軍が引き起こした無分別、理不尽な侵略戦争云々・・・と。最近、月刊「日本会議」に連載された表題の投稿文は、若手の歴史家が長年研究した中国近代史の中で、日支事変に至る背景を究めたもので、歴史の真相を知り、「中正な歴史認識」を持つ上で一読に値すると思う。他の資料をも参照し、日支事変勃発の背景について、自分なりにまとめた要旨を紹介する。

“天下人不在の中国”・清朝崩壊後の政局の混迷からもたらされたもの

豊臣秀吉は小田原城攻めで北条を滅ぼし、伊達政宗を懐柔して天下人として日本の統一を成し遂げた。片や清朝崩壊(1912)後の中国は、蒋介石が新国民政府を樹立する(1932)までの20年間、「北伐(軍閥の討伐)」に明け暮れ、終盤の中原大戦(軍閥の大反乱)では2千万を超える民衆の犠牲が出るほどの凄惨な戦が行われた。軍閥平定後の国民政府は共産勢力の撲滅に転じ、大規模な「掃共戦」を繰り返した。この間、日本(軍)の介入も加わり、中国各地で三つ巴(どもえ)の複雑な謀略事件、事変が頻発し、満州事変、1・2次上海事変はこれらの中で起こった武力衝突であった。日支事変の直前に国民党と共産党が手を結ぶ「国共合作」が成立したが、抗日戦のための苦渋の選択、窮余の一策であり、統一政府・統一戦線と言えるものではなかった。

加えて米英(対国民党)とソ連(対共産党)の加勢(武器供与)が、日中関係の悪化に拍車をかけ さらに「共産ソ連」を承認・支持する米大統領ルーズヴェルトの(二足ワジ的な)対日声明が、日本の国策判断を狂わせ、日本の孤立化とともに問題を複雑にしたことも否めない。 いつ・どこで何が起きてもおかしくない一触即発の情勢にあった。結局、中国の統一は戦後の国共内戦(1949)まで持ち越され、清朝崩壊後37年間の天下人不在の混迷状態が日本及び戦後の極東情勢に及ぼした影響は計り知れないものがある。封印された歴史からは戦争の真因を究めることも、戦争防止のための反省も生まれてこないと思う。

「歴史は作り変えられ、封印される」・そのままよいのだろうか

歴史は繰り返すだけでなく「都合よく作り変えられ、都合の悪い歴史は封印される」一面を多分に持っている。アヘン戦争(の実態)をご存知であろうか。現代の中国では麻薬を所持していただけで、国籍、理由を問わず即決裁判で死刑を免れない。なぜ中国が麻薬に対してここまで過敏な対応をとるのだろうか。170年前のアヘン戦争に根差していると思うのである。それではなぜ中国は当事国を糾弾しようとならないのだろうか。それ以前に英国では学校でアヘン戦争をどのように教えているのだろうか。東南アジア諸国を植民地として隷属化し、アヘン戦争以降 満州事変勃発までの90年間、眠れる獅子・清国 にコンドルのごとく群がり、貪り続けてきた西欧列強の行為・歴史を、どのように理解すればよいのか、長いこと疑問に苛まれてやまない。 <日本会議千葉所属、川村 巖 会員(海)>

随想

南房総の水上・水中特攻基地「終戦直前の出撃待機命令」



<南房総沿岸に建設された特攻基地の一つ。海龍の「滑り」と推測される>

終戦の年の6月末、房総岩井袋で1600余名の突撃隊員からなる海軍特攻戦隊・第18突撃隊が編成された。司令、副長に次ぐ「特攻長」として発令されたのが、戦後、第11代海上幕僚長の中村悌次海軍大尉(当時)であった。突撃隊員を直接指揮し号令をかける立場であった。

昭和19年7月のサイパン・マリアナ群島の陥落を機に、大本営は本土決戦を想定して作戦及び部隊の配備・装備方針の大転換を余儀なくされた。本土決戦に対して消極的であった海軍も昭和20年3月には、九州から四国、中部東海、関東、東北に至る太平洋沿岸一帯に水上・水中特攻基地の建設を下令し、突貫工事に拍車をかけた。

岩井袋に司令部を置く第18突撃隊は、連合国軍の本土上陸を水際で阻止する特攻部隊として勝山、大房、波佐間ほか各所に震洋、海龍等の特攻艇を配備する基地の構築を進めた。

現存する「第18突撃隊戦時日誌(S20年6月末~7月末分)」には、基地の整備や兵器の配備状況とともに、上級司令部から伝えられる戦局・戦況が克明に記録され、当時の切羽詰った状況が伝わってくるようである。

突撃隊に出撃待機命令

昭和20年7月24日、第18突撃隊に対して出撃待機が下令された。まだ装備は整っていなかったが、震洋艇6隻(爆薬装備)、海龍艇2隻(魚雷搭載)、技量錬度Bクラス以上の突撃隊員が選抜され即時待機に就いた。出撃下令15分以内に発進できる態勢であった。これは米機動部隊の本土接近を感知し、関東海面への近接必至との上級司令部の判断によるものであったが、結局は、機動部隊はこの後太平洋沿岸に沿って北上し、即時待機も解かれている。しかし白浜灯台付近の艦砲射撃、艦載機による三沢基地空襲や北海道小樽の製鉄所に対する艦砲射撃は、この機動部隊の一連の作戦行動によるものであろう。

水上・水中特攻部隊は、終戦まで出撃することなく、待機に終わったことは天佑とすべきであろう。

突撃隊には、爆薬を抱いて目標に突っ込む震洋艇、回天艇と、片や雷装(魚雷搭載)か爆装(爆薬装備)かによって運命が

中村悌次大先輩との出会い・突撃隊員たちの思い

8年ほど前の初夏、原宿の水交会で偶然、中村悌次大先輩とお会いした。先輩と言っても面識などあるはずなかったが、図図しくもこちらから名乗り出てロビーでしばしお話しする機会に恵まれた。突撃隊の話を持ち出すと、感慨深そうな面持ちで記憶の断片を語ってくれた。その場は10分程度であったが、いざれ涼しくなってから改めて機会を設けましょうと氏から提案され、期待に胸膨らんだ。ところが秋になって(7月半ばに)急逝されていたことを知り、愕然とした思いであった。

水交ロビーでの短い会話の中で、「(特攻長として発令を受け)いよいよ来るものが来たかという心境だった。しかし集まった若い突撃隊員には、地上員や生還の可能性のある海龍艇の乗員を妬んだり軽挙妄動に走る者は居なかった。“自分たちがやらなければ誰がやってくれる”という気持ちがみなぎっていた」と当時の心情を吐露していたのが強く印象に残っている。

<自称地域史探索マニア(海)その9>